

海南行（細川頼之）

人生 五十 功 無きを 愧ず

花木 春 過ぎて 夏 己に 中ばなり

満室の 蒼蠅 掃えども 去り難し

起つて 禅榻を 尋ねて 清風に 臥せん

人生五十愧無功 花木春過夏己中
満室蒼蠅掃難去 起尋禪榻臥清風

解説 作者が晩年その志を達せず、功業の成しがたいのを知り、四国の讃岐に帰るに際してその心境を述べたもの。

語釈 ※海南行||海南は讃岐であるが、海南の地に赴く意を題した
もの。※花木||花の咲く木。※夏己中||このとき五月であったので
夏すでに中ばといった。※蒼蠅||青ばえ。(讒言する小人にたとえ
る)。※禅榻||禅家の長椅子で、座禅に用いる。

通釈 人生五十と言われるが、その五十になってしまった。その
齡を過ぎているのに、さしたる功績もないのは恥ずかしい。今は夏
となり、その夏も、はや半ばとなった。わが人生も、はや盛りも過
ぎたことを痛感するが、部屋には青蠅どもが部屋一杯に飛び回り、
うるさく人にたかり、払っても追い払うことができない。(多くの
小人どもが人を讒言して、勢力を張っているが、追いはらうことが
できない事と同じであろうか。) この辺りで、部屋の外で座禅椅子
のある処を探し、清らかな涼しい風に吹かれながら、横になるこ
ととしようか。